

「もの」には物語があります。大切にしてください。このコーナーでは、長崎大学のキャンパスに眠るお宝や芸術作品をクローズアップ。その背景を知り、好奇心をくすぐられたら、今度は本物を観に大学に足を運んでみませんか？

温故知新

Find new wisdoms through old things.

Volume

8

爆心地から五五〇メートルという至近距離で被爆した長崎医科大学（長崎大学医学部の前身）では、学生や大学関係者五〇〇余名が亡くなりました。当時の建物で唯一現存するのが坂本キャンパスのゲストハウス。正門を入って右手、良順会館の奥の雑木林の中にひっそりと佇んでいます。昭和六年に大学関係者の宿泊用に建てられ、当時の学長が宿泊したこともあるのだそうです。戦時中、一時期は配電盤室の役割を担いましたが、今ふたたび、本来の目的であるゲストハウスとして利用されていることをご存じでしょうか。医学部の歴史研究をライフワークにしている相川忠臣名誉教授にお話を伺いました。

「被爆直後の写真を見ていただければわかるように、一面焼け野原のなかに建っているのがこのゲストハウスです。これら一連の写真のなかには、米国の雑誌『TIME』の表紙に使われたものもありました。焼け残ったいくつかの建物は鉄筋コンクリート造で、木造校舎にいた学生たちは全員即死でした。教室に整然と座ったまま黒骨化（白

図書館に行ってみました。医科大学の教員でもあり「長崎の鐘」の著者でもある永井隆博士の手記が残されており、そこには被爆直後の医科大の人々の奮闘ぶりが描かれています。

「学長先生をお救い致しました。見ると玄関に友清が現れた。その背には真赤な人がおんぶされている。隊長がかけつくと、白髪も顔も血に染まった学長先生。気力は確かで、「大変だね、御苦労だね」と申された。（中略）「患者を裏の丘に上げよ、百米上方の畑だ」と隊長が命令した。普段通る路は壊れ塞がっている。岩肌をよじ登らねばならぬ。一人又一人と手運びで担ぎ上げる。運んでいるうちに息の絶えるものがある。遺

骨ではなく、骨は黒こげになった）していったといえます。その瞬間、たまたまコンクリートの建物の陰にいたことで命を救われた人もおりました。その彼らが、まだ炎の残るなかで救助活動を行ったのです。原爆が炸裂したときにどこにいたかが、運命の分かれ目となりました。」

それにしても築八十年、しかも至近距離で放射能と爆風にさらされた建物が、まだ使われているとは驚きました。

「私たちがびっくりしたのですが、昔のコンクリートの建物は本当に頑丈で、このゲストハウスも、内部を改装しただけで、今も何の支障もなく使用しています。四部屋の客室とキッチンもあり、留学生や学校関係者が宿泊していますよ。三十年前くらいまでは、大学関連の被爆建物がいくつが残っており、私たちはみんなそこで学びました。小児科病棟など、取り壊すときは鉄の塊をぶつけても壊れないほどでした。今では、被爆を物語るのはこのゲストハウスと門柱ぐらいいしか残されていません。」

被爆当時の様子を知らうと附属

髪を切り取ったりする。水も飲ませて廻る。迷子の親も呼ばねばならぬ。三時間ばかりこうして働いた。患者を全部安全な丘の上の畑に移した。そうして今改めて病院を見ると、既にとの窓も火と黒煙を吹いている。「ああ、治療室が焼けます」「ボリクリ室も火を吹いています」「私の部屋もおしまいです」「三相交流も燃えちゃった」各人が云う。患者搬送に時を奪われて、機械を取り出す時間を失ってしまった（中略）——「おしまいだ」と隊長が低い声で言った。女の子たちは涙ぐんだ。（長崎医科大学原爆記録集）第一巻より

終戦後は、大学存続の危機に瀕しながらも、歯を食いしばってこの地での復活に奔走した関係者。そして現在まで、このゲストハウスは人々をずっと見守ってきたのです。

「平成十九年に良順会館を建てるにあたっては、あえて一階の奥の壁を全面ガラス張りにして、その向こうにある被爆遺構が見られるよう設計されました」と相川先生。被爆の記憶をとどめる貴重な建物。その前に設置された紹介パネルの英訳文には、再びゲストハウスとしての役割を担っていることを記し「once again」と書かれています。



写真提供/原爆資料館(撮影・米軍)

長崎大学医学部に
現存する唯一の被爆遺構

ゲストハウス

坂本キャンパスに
ひっそりと存在するこの建物。
被爆を越え、今ふたたびゲストハウスとして
利用されています。

坂本キャンパス、良順会館の奥に位置する被爆遺構。一般の見学は外からのみ。大学関係者のゲストハウスとして今も使われているため、内部は公開されていない。

